

書評

重森 稔・片山 容一・小林 士郎 編

小児頭部外傷

平川 公義(東京医科歯科大学)

小児の頭部外傷に関しては、従来、わが国には成書がなかった。小児の外傷は、卑近かつ危急の存在である。路上、家庭内を問わず、一瞬の油断は受傷者周辺に恐怖と混乱を招く。CTは確かに診断法を変えた。モニターは病態把握の武器となった。そして死者は減ったか。それは医療の故か。子供の怪我ではどうか。救急医、外科医、脳外科医、小児科医は、自信をもって頭の怪我に対処できるのか。これらの疑問に答えるべく、経験豊富なわが国の神経外傷学を担う新進気鋭の第一線の学者・臨床家の共同執筆により「小児頭部外傷」が出版された。

本書の構成は、総論として、小児の頭部外傷の疫学、病理、分類、病態、プライマリーケア、診断法、各論として、頭蓋外の損傷、開放性・閉鎖性脳損傷、周産期外傷、合併損傷、ICU管理、後遺症、慢性期の治療、転帰の項よりなる。力点が置かれているのは、まず、頭部外傷なるものの概念の解説である。最近では、脳損傷はびまん性損傷と局在性損傷に分けて論じられる。小児の脳損傷は、そのどこに位置付けられるか。プライマリーケアの項はきわめて実践的で、初心者はこれをなぞることによって、治療の実際を会得するに違いない。意識障害の把握は成人と同様のGlasgow Coma Scaleでは数えられない。画像診断にも、モニターにも、要点がある。各論に入れば、頭皮にも、骨折にも、脳損傷にも、各々小児ならではの特殊性があり、治療に考慮が要る。周産期の障害や脊椎損傷を見逃すことができない。転帰の項は、小児の頭部外傷がおかれている現状を把握するのによい。

分担執筆の際には、本書でも見られるように、項目内容の重複は避けられない。しかし、重複は各執筆者の方針や実務内容を反映して画一的でないところが面白い。総じて、経験豊富な編者の執筆した項に重点が置かれている。その結果、項目によって力の入り方に差が生じるのは致し方ない。小児の場合には、発達時期によって、骨・脳とも物性は異なり、機能に違いが出る。したがって、新生児期から学童期に至るまでの年齢に応じた力学的応答としての傷害の表現、あるいは年齢に応じた病態応答の差が各項に記載されていて欲しいところである。直したい点もある。時として「頭部外傷」の記載はあっても、「小児の」への視点が不足すること、文献に頼る部分のあること、小児の脳循環の数値がないこと、小児の画像で統一しなかったことなどである。将来は慢性血腫、てんかん、社会復帰などは独立した項とすべきであろう。間違いを1つだけ指摘したい。小児頭蓋内血腫の中村II型は、硬膜外血腫であって、硬膜下血腫ではない。例外を考えなければ、2歳を過ぎると、乳幼児期独特の硬膜下血腫は見られない。児の頭の構造、行動の広がり、それに伴う外力の大きさなどによって、概括的に小児の急性期の頭蓋内血腫は3型に分けるのがよい。

本書に多少の欠陥はあるにせよ、ここで小児頭部外傷治療の指南書が現れたことは、まさに快挙である。本書は、21世紀に向けて、小児頭部外傷学の羅針盤の役割を果たすことになろう。

(B5 頁240 定価(本体11,000円+税) 1996 医学書院刊)